（十四）桃ちゃん

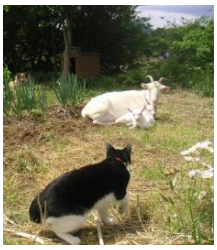
いいねぇ、お雛様、きれいだねぇ、とひと月楽しんだ後、いつもの生活情報誌の記事を見て、女房と娘が生後 3 週間の黒白の雌の仔猫をもらってきた。

最初の日、母猫と兄弟から突如引き離された小さなちいさな仔猫は、おずおずとあたりを見渡すばかりでソファから動かなかった。そして桃の花の咲くころ生まれたから「桃」と名づけられ、アッという間に大きくなった。グルメの猫には珍しく、ドライフードのカリカリを「こんなまずいもの、アタクシいただきませんの」と拒否することはない。その結果、代々の猫の中で最大となった。「桃ちゃん」というよりは「桃太郎」である。

そういえばアメリカに住んでいたころ、ペット屋さんで「アメリカの猫は日本の猫よりいったいに大きいみたいだけど？」と女房が尋ねたことがある。「そりゃたくさん食べているからに決まってるでしょ」と店員は鼻で笑い、そうか、肥満の国アメリカでは、大食らいと太り過ぎは人間だけではないのか、ペットもなのか、と夫婦して感心（？）した覚えがある。

猫と犬を仲よくさせようと、亭主は仔猫のうちに桃を抱いて犬のところへ連れて行った。OK だ。やっぱり猫が小さいうちだと大丈夫なんだね。が、数週間後、もう一度亭主が試すと、犬のジョンは喜んで近づいたが、桃はイッチョマエにフーッと怒る。まあいいじゃないの、とご機嫌をとり、犬の鼻面につきつけたとたん、桃は素速く猫パンチをくらわせた。ちゃんと爪を出していたらしく、ジョンはキャインと鳴いてとんで逃げた。

あーあ、失敗。



桃は犬が嫌いだが、山羊は気になるらしい。特に仔山羊は気になってしかたがない様子である。遠くから眺め、ジワジワと近寄り、そして母山羊が警戒して立ち上がると、近寄

るのを諦める。見ていると、もの言わぬ動物たちの気持ちがわかるようでなかなかおもしろい。

この桃ちゃん、手を使うのが上手である。「『手』じゃないでしょ、『前足』でしょ」と科学的に言うのは次男である。しかし、「手」と言いたくなるほど、ちょいと持ち上げて人間に触る様子が器用である。そして、桃は咬（か）む。やたらと人間の手や顎を咬む。攻撃、というより、口で触ってみる、というか、じゃれているという感じもしないではないが、咬まれる側は痛い。

「しつけよう」と女房は提案した。

「猫をしつけられるわけがない」と亭主は笑った。

「でもあたし咬まれるのイヤ」

女房は桃に咬まれるたび、桃をひっつかんで喉（のど）の奥に指を突っこんだ。猫はゲッといやがる。

そして女房には咬みつかなくなった。

女房は得意である。

亭主は相変わらず抱っこしては咬まれている。

が、ついに堪忍袋の緒が切れた。亭主は桃に咬まれるたびにその頭をひっつかみ、猫の耳を咬んだ。桃はフギャッと鳴く。亭主は口に入った猫の毛をペッペと吐き出す。

変わった亭主である。

しばらくして、動物の販売規制に関する法律の記事が新聞に出た。動物は幼ければ幼いほど可愛いらしくてよく売れるから、売るほうは生後 2 週間でも 3 週間でも売りたい。しかし動物愛護団体は、せめて生まれてひと月、できればふた月は親と一緒にいさせねば可哀そうだし、早く親から離すと情緒不安定になる結果、大人になっても咬みつき癖が治らない傾向がある、と反論する。

そうか、桃がウチに来たのは生後 3 週間、今までの猫の中で一番幼かった。咬みつき癖はそのせいかもしれない。

桃ちゃん、ゴメンね。人間の都合で親から早く離させて。

家を出て大学に行っている長男が、休みで帰ってきた。この長男、小さい時から極めつきの猫好きである。小学校にあがったとたん、田舎のことで学校から3キロ歩いて帰る間に、捨て猫とおぼしき仔猫を見つけるたび、全部、もれなく、連れ帰った。1年3カ月で合計8匹の仔猫を連れて帰ったのである。

一度なぞは小川の向こう側の猫に触りたくて、小川を飛び越すつもりがボチャンと水に落ち、息子は11月の寒い日にパンツまでビショ濡れになった。

それでも懲（こ）りない。

女房が叱っても叱っても、だって可愛いんだもん、と息子は猫を連れ帰る。

ウチでは飼えないよ、と女房はコッソリ捨てに行く。この時、6歳の長男を頭に4人のわが子がいた。猫は1匹で充分である。このころは生活情報誌に「里親募集中」の記事を出すなんて余裕もまるでなかった。

テキトーな団地を見つけ、女房が車を止めて2匹の仔猫を段ボール箱から出していると、後ろから声がした。

「ここに猫を捨てないでくださいッ」

振り返ると、般若のごとき形相の若い女性が髪を逆立てる勢いで女房を睨みつけている。

ゲッ、あたりに人がいないのを確かめた筈だったが見つかったか、と女房、首をすくめ、平謝りに謝って猫を2匹もう一度車に戻す。なんで息子のためにアタシが叱られなきゃならんのかい、と情けないやら腹が立つやらであった。

その大きくなった猫好き息子に向かって、桃はフーッと歯を剥（む）く。息子が手を出すとひっかく。咬（か）みつく。すぐに息子の腕にはみみずばれができて血がにじんだ。どういうワケか、ここまで桃が攻撃するのはこの長男だけ。ふだん猫は客が嫌いで、人が来ると逃げて出てこないことが多いのだが、桃は妙に人懐（なつ）こくて、フランス人の家族が泊まりに来た時も、ずっと日本語のわからないフランス人小学生の相手をしてくれていた。その桃が、この猫好き息子を嫌う。が、

同じく家を離れている長女が帰ってきた時は、嫌わずに同じ布団で寝た。娘は猫に遠慮してふとんの隅っこに身を縮めて寝ている。

猫の好みはわからない。

桃が来て半年たったころ、家の裏に捨て猫があった。

ヤレヤレ、またか。

女房も亭主も捨て犬・捨て猫にはもう飽き飽きして、とりあう気がない。

ところが 11 月の氷雨（ひさめ）がショボショボ降る夜じゅう、裏の小川のほとりから鳴き声が続き、朝になっても小さな姿は動かない。

やかましさに耐えかね、亭主と女房が近づいてみると、生後 2 カ月ほどの真っ白い仔猫の目が目ヤニでつぶれている。

これでは生きていけまい。

さすがに夫婦は情けを出して連れ帰り、目ヤニを拭いて餌をやった。

白猫は汚れが目立つ。掃除嫌いの女房の趣味には合わず、飼う気はないから、土間から中へは入れてやらない。毎度おなじみ生活情報誌の「里親募集中」コーナーに掲載してもらい、引き取り手が見つかるまでの世話だ。

アァめんどくさい。

哀れな仔猫はろくに餌も食わず、歩き回りもせず、ミャミャア鳴き続ける。

何か障害があるんじゃない？ 女房はいぶかった。

家にあった人間の疲れ目用の目薬を朝晩さしてやるが、いっこうに効かない。目の縁は赤くただれてヒドイご面相である。これではたとえ里親希望者がいても逃げて行く。たまりかねた女房は、着ているフリースの上着のジッパーの中へ小さな猫を突っこんで、神社下の安い獣医へ連れて行った。暖かいところで安心したのか、仔猫はミィとも言わずぐっすりと眠ってしまった。

女房が番を待っている間、仔猫は人から見えない。受付をする獣医の女房から「動物はどこでぇ？」と聞かれ、女房は黙ってジッパーを下げて見せ、獣医の女房は吹き出した。この人のいい獣医の女房も、毎度捨て犬捨て猫の世話をしている女房のことをよく知っている。

「あんたんとこはなぁ、周りでもう、犬や猫を捨ててもちゃぁんと世話してもらえるって知られてんだよ。だから人がよく捨てていくんだっぺ。そういうところがアッチコッチにあっぺよ」と笑う。それはいいやら悪いやら。

そして幼い犬猫を捨てる元の飼い主を憎む気持ちは女房と同じで、「目ヤニがひどいから、この仔猫捨てられたんだよ」と腹立たしげに言う。

注射と目薬代がたったの 1,000 円。

この獣医は儲ける気がないらしい。医院の建物も倉庫を改造したというより、まるで倉庫そのもので、医者と患者（？）は狭いコンクリートの床の上を土足で歩く。制服を着た美人の若い受付も、コンピュータも、待合室もないから安上がり、というのもあるようだった。

「こういう猫にはなぁ、ものもらい用なんかの化膿止めが入ってるやつなら、人間用の目薬だっていいんだっぺ。でも疲れ目用とか、ドライアイ用じゃ効かないべ」と獣医の先生は笑う。

あくる日にはもう目ヤニは減り、そしてチビ猫は土間から居間へ入る猫用の扉を見つけ、中へ入ることを覚えてしまった。

家の中は暖かい。よく眠る。食欲も増し、活発に動くようになった。

何だ、衰弱していたんだ。

鳴いていたのも、具合が悪かったんだ。

可哀そうにねぇ。早く居間まで入れてやればよかったか。

ゴメンね。

チビを捨てた人がほんとに憎たらしい。

しばらくして女房が近所の家へ出かけた帰り、3 軒隣の家の庭先に、今世話をしている仔猫そっくりの尻尾の長い白猫がいた。

女房は目を疑った。

チビは家にいた筈だが。

あくる日、犬を散歩に連れ出すと、前日と反対の方向でまた白猫を見かけた。素早く逃げる。

ドッペルゲンガーか？

チビ猫はあの幼さで分身の術を使ったか？

まさか。

2日後、謎が解けた。同時に2匹を見たのである。たぶん、チビの兄弟だ。チビより一回り大きいことを除けば、チビと瓜ふたつだった。

桃はしばらく、この新参者を遠くから眺めるばかりで相手にしようとしなかった。が、チビのほうはまだ母親恋しい年ごろである。巨体の桃にすり寄ってはころがされ、ジャレついてではのしかかられている。そのうち2匹は仲良くなり、見ると、ソファにデンと寝そべる桃の乳をチビがチュウチュウ吸っている。桃は嫌そうだが、そこは年増の貫録、「しょうがないわねぇ、このチビ」という顔でほうっている。

まるでマツコデラックス。

3日後、生活情報誌が来た。ちゃんと電話がかかった。話が決まり、待ち合わせの場所に行ってみると、歯が1本抜け、手編みのベストを着た、いかにも人のよさそうなじい様が猫のケージを持って心配げに立っている。

亭主の腕に抱かれたチビを見たとたん、じい様はとろけそうな笑顔になった。

「白猫が欲しくてねぇ、ずっと探してたんスよ。前いたのが死んじまって、ウチは今子どもがいないもんだから家ン中がさみしくってねぇ、ああよかった」

これ、とクッキー1箱をご丁寧に差しだし、女房が「ハイこれが目ヤニの薬。2、3日は朝晩さしてやってくださいね」と告げるのを、じい様はちゃんと聞いていたかどうか、ずっと暖かい視線をチビからはずさない。

この人なら可愛がってくれるに違いない。亭主も女房も2週間の苦労が報われたのであった。

帰って桃を抱きあげてみると、乳首が2つ、真っ赤に腫れあがっている。マァ痛そう。桃ちゃん、未婚の処女だよね。避妊手術もしたし。それでも母親代わりに乳が出ない乳首を吸わせてやったのね、エライ。

桃ちゃん、御苦労様でした！